

草鞋は音さへ立てない。なんとのだかな旅であらう。なんと山の静かなことであらう。

幾山河越えさり行かば寂しさは終てなむ國ぞ今日も旅ゆく

○同上。「中國を巡りて」とある九首中の一首。

旅は寂しい。どこへ行つても寂しい。いくつ山と河とを越えて、どここの國まで行つたならば、この寂しさが無くなることであらう。と思ひつつ、今日もまた寂しく旅をつづけることである。——收水は旅の詩人であつた。旅の歌のすぐれたものが實に多くある。

酔うて入り酔うて浪華を出てて行く旅びとに降る初秋の雨

○同上。

旅をして大阪に入つた時にも酔つてゐた。大阪を出てゆく時にも酔つてゐた。そしてうすら冷たく初秋の雨が降つてゐた。——收水は旅の詩人であると共に酒の詩人でもあつた。「昨日飲みけふ飲み酒に死にもせで白痴笑ひしつくなほ旅路ゆく」といふ歌もある。

鐘おほき古りし町かな折しもあれ旅籠に着きしその黄昏に

○同上。奈良でよんだ歌。

旅籠に着いて旅装を解いた、ちやうどその黄昏にあちらからもこちらからも鐘が鳴り出した。鐘の多い、いかにも古い都らしい町であると、しみじみ感じた。

もの多くいはずあちゆきこちらゆき二人は哀し貝をひろへる

○同上。「女ありき。われと共に安房の渚に渡りぬ。われその傍らにありて、夜も晝も断えず歌ふ。明治四十年早春。」とある長い連作中の一首である。

その時の景、その時の情がありありと察せられる。

父の髪母の髪みな白み來ぬ子はまた遠く旅をおもへる

○「別離」下巻の歌。下巻は明治四十一年四月から四十四年一月までの作。この歌は「故郷にて」五首中の一首。

歸省して父母の年とつたことを感ずること程さびしいものはない。父の髪も母の髪もみな白くなつてきた。この年とつた両親を見ては、自分は自分勝手な志を捨てて、長く故郷に留つて孝養を盡さねばならぬと思ふ。けれども又一方では、やはり氣儘な心が起つて、遠く旅に出たいと思ふ。この自分の心を何ともすることができない。旅を思ふ人の子の苦しさ。

秋晴のふもとを白き雲ゆけり風の淺間の寂しくあるかな

○「路上」の歌。明治四十三年九月から十一月まで信州淺間山の麓に遊んだ時の歌九十六首中の一首。

秋晴の山の麓を、風の吹くままに白い雲が流れて行くのである。風の靜かに吹いてゐる淺間山のなんと寂しいことよ。

白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけれ

○同上。同じ九十六首中の一首。

秋の夜の酒は、真白い齒にしみとほるやうに感ずる。かうした夜、かうした酒は極めてしづかにしんみりと味はひ

つつ飲むのがいいのだ。と獨り頷きながら楽しんでゐる酒である。

水の上へにふりきてきゆる雪の見ゆ酒のにほひの身に残るあり

○同上。

齋藤茂吉の歌に「水のうへにしらじらと雪ふりきたり降りきたりつつ消えにけるかも」といふのがある。さういふ景色を見ながら、自分の身のどこやらに残つてゐる酒のにほひを感じつつ、それに陶醉してゐるのが、牧水のこの歌である。

雨、雨、雨、まこと思ひにつら勞れぬき、よくぞ降り來し、あはれ闇を打つ

○「死か藝術か」の歌。この歌集は明治四十四年九月から四十五年七月までの作を集めたもの。

雨よ、雨よ。雨が降つてきた。自分は先刻からとりとめもない物思ひに耽つて、もう物思ひに疲れてしまつてゐた。その時、雨が降つてきた。よく降つてきてくれた。ああ、雨が闇を打つて音を立ててゐるではないか、さいつて、作者は疲れた心で、狂氣のやうになつて、雨の音に聞き入るのである。さうした心持をあらはすのに、句讀の切り方がびたりとはまつてゐる。かういふ類の歌が「死か藝術か」の中には少からずある。

浪に酔ひしかほろほろに我が心すすり泣きして海邊を去らず

○同上。四十四年十月から十一月へかけて相模の國を旅行した時の歌、三十一首中の一首。

自分の心がわけもなくほろほろと泣いてゐるやうに、悲しいことばかり思つて、いつまでも海邊を去らない。なぜこんなに悲しいのだらう。なぜこんなに海に引きつけられるのだらう。浪に酔つたのであらうか。さても寂しい旅である。

ある。

さびしさを戀ひ戀ひて身は眼無鳥なしきつ、ものないひそね、山へいそがむ

○同上。「信濃より甲斐へ旅せし前後の歌」十六首中の一首。

さびしさを戀ひ慕つて、ちようと我が身は目のない鳥のやうに、ただ一向にさびしさを求めて進む。友よ、物をいつてくれるな。黙つて許してくれ。自分はさびしさを求めて山への旅に急がう。

燈臺の青いろの灯もともりきぬ啼く音をやめよ浪間の千鳥

○同上。四十五寺五月末、相模國三浦半島の三崎に遊んだ時の歌。百一首中の一首。

夕方になつて、燈臺の青い色の灯もともつた。浪間で千鳥はまだ鳴いてゐる。千鳥よ、鳴くのをやめよ。そしてちつと夜の静けさに浸らうではないか。

前田 夕暮

本名洋三。明治十六年七月神奈川縣中郡大根村南矢小南に生れた。はじめ尾上柴舟に師事し、後に白日社を起し、雑誌「詩歌」を主宰した。「詩歌」の廢刊後、「日光」の同人であつたが、昭和三年に至つて「詩歌」を復活して發行してゐる。歌集は左のとほり。

- 收 穫 明治四十三年三月
- 陰 影 大正元年九月
- 生くる日に 大正三年九月

黒曜集 大正四年五月

深林 大正五年九月

前田夕暮集 大正六年九月

原生林 大正十四年十月

虹 昭和三年三月

泣き泣きてつかれはてたる人に似る海は夕日に凧ぎぬしづかに

○「收穫」の歌。明治四十年の秋以前の作である。

今まで波の立つてゐた海が夕方になつて凧いでしまつた。その様を、たとへば泣きに泣いて泣き疲れてしまつた人のやうだと譬へたのである。泣き疲れてしまつた人のやうに、海は夕日に照らされながら、靜かに凧いでしまつた。といふ歌である。

濁りたる海原みゆる、その上を一羽の鳥の行くが悲しき

○同上。四十年から四十一年へかけての作中の一首。

平明な歌である。青春の憂鬱とセンチメンタリズムとが歌はれてゐる。

いはれなく君を捨てなむ別れなむ旅役者にもまじりていなむ

○同上。四十二年の作。

これといふ理由もなく、ただわけもなく君を捨ててしまはう。君と別れてしまはう。そして自分は戀を失つた寂し

さをしみじみと感じながら、旅廻りの役者たちの中にもまじつて、どこにも知れぬ旅に出てしまはう。

風暗き都會の冬は来りけり歸りて牛乳のつめたきを飲む

風が吹いて陰鬱な都會の冬は来た。自分は夜おそく寒い風に吹かれて下宿へ歸つてきて、ひとりで冷たい牛乳を飲むのである。都會生活のあぢきなさ。「火の氣なき宿に歸りてくらやみにマチをたづぬる指のつめたさ」「ておひたる獸の如く夜深くさまよひいづる男ありけり」なども同じ頃の作である。

夜の町のおかるみをゆきわが家をふとおもひいで心かなしむ

○「陰影」の歌。四十三年の作。

「赤錆びし小さき鍵を袂にし妻とあかるき夜の町に行く」といふ歌につづけて作られてゐるから、これは妻と二人で町を歩きながらの心持を歌つたものである。銀座——でなくても、銀座的なところ、すべての男女が楽しい事ばかりを持つてゐるかのやうに見えて來往するところ、あらゆる刺戟の強い色と光との交錯するところ、そこを妻と二人で行きながら、ふと自分たちの家のことを思ひ出す。そしてほのかに悲しい心になるのである。

石川啄木

本名^{ハシノ}。明治十八年、岩手縣遊民村に寶徳寺といふ寺の子として生れた。父の名は一禎。盛岡中學卒業後、代用教員をしたり、新聞記者をしたりして、或は北海道に在り、或は東京に出て、病苦に堪へ、貧困と戦つた。十九歳の頃から「明星」その他に詩を發表してゐたが、二十一歳の時、明治三十八年五月初めて詩集「あこがれ」を出版した。四十

一年、二十四歳の夏から急に作歌に熱中し、四十三年十二月「一握の砂」といふ歌集を出した。四十五年四月十三日病死。享年二十八。その死の直前に第二歌集が出るこゝになつてゐたが、意を果さずして永民したので、そのノートを基にして土岐哀果が編纂して出版したのが「悲しき玩具」で、四十五年六月二十日の出版である。「啄木遺稿」があり又「啄木全集」がある。

東海の小島の磯の白砂に

われ泣きぬれて

蟹とたはむる

○「一握の砂」巻頭の歌。四十一年夏の作。「一握の砂」は五篇に分れてゐるが、その第一篇は「我を愛する歌」と題せられてあつて、これはその最初の一首である。

啄木の歌では最も有名なものの一である。意味は極めて平明であつて、ロマンチックの香氣の高い歌である。「現代文藝」第二十四號(大正十五年四月)所載の西村陽吉氏の「啄木短歌評釋」によると、「いつか北海道で宮崎郁雨氏に逢つた時聞いた」として、この「東海の小島の磯」は函館の海岸であるといつてゐる。

大海にむかひて一人

七八日

泣きなむとすと家を出てにき

○同上。「我を愛する歌」の中。

この「大海」も前の歌と同じく函館の海である。大海に向つて一人で七日か八日も泣かうと思つて家を出た。といふのは、堪へ難い苦痛を持ち、煩悶を抱いてゐるからである。しかもそれを訴へるべき人もなく、よしんばあつたところで、人に訴へて慰められるやうな心ではない。ただこの心を大海に向つて投げ出し、思ふままに聲をはりあげて泣けば、しかも一日や二日でなく、七日も八日も泣き続けたならば、いくらか慰むこともあらうと思つて家を出たのである。

いのちなき砂のかなしさよ

さらさらと

握れば指のあひだより落つ

○同上。

やるせない心で、砂濱に身を横たへ、弄ぶともなく砂を弄んでゐる、一握り握ると、砂はさらさらと指の間を洩れてこぼれる。何の心もなく砂はこぼれるのである。砂には命はないのである。と思ふと、この悲しみ、この愛へを持つてゐる自分がたまたま寂しくなつてくるのである。

大といふ字を百あまり

砂に書き

死ぬことをやめて歸り來れり

○同上。

死なうと思つて出て來た海岸である。ある時はつきつめて死んでしまはうと思つた。けれども海岸に來て、砂に横たはつて、書くともなく指で砂に字を書いてゐた。何の氣なしに書いてゐたのを、後から見ると、同じやうな大といふ字ばかりが澤山書いてある。およそ百あまりも書いたらうと思はれる。そのやうにして字を書いてゐるうちに、やはり生きて行かう、今死ぬことはできない、どんなに苦しんでも生きて行かうと思ふやうになつて、ついそのまま家に歸つて來てしまつた。しかし歸つて來てから思ふと、又しても自分がふがいない者に思はれ、折角決心して死ぬつもりで出て行つたものを、死ぬことをやめて歸つて來てしまつたことが、いかにもなまきけなく思はれるのである。

たはむれに母を背負ひて

そのあまり輕きに泣きて

三步あゆまず

○同上。

奇抜な歌を作らうとか、人のあまり歌はないところを歌つてみようとかいふやうな考で作られた歌ではない。極めて嚴肅な歌である。「おまへも大きくなつたねえ。今まではおんぶしてあげたんだが、今ぢやあ、とても、却つてお母さんがおんぶして貰ひたい位だ。」といふやうな事を母がいつたとする。氣輕な心持で「ぢやあ、おぶつてあげま

せうか。」と子がいふ。母もなかば戯談のやうに、それに應ずる。子は背を向ける。ちよつとの間躊躇した後、思ひ切つて兩手を肩にかけてきた母を、子は背負つて立つ。いくら年をとつたといつても、もう少し重いものかと思つたのに、意外に軽い母であるので、忽ちにして泣きたい心になつて、ともかくも一步、二歩と歩いてはみたが、三步とつづけて歩む氣にはどうしてもなれない。戯れどころも軽い氣分もなくなつて、黙つて立止つて、背を低くして母をそつと疊の上におろす。この心、この涙は嚴肅な涙である。これは永久なる人の子の歎きである。

鏡屋の前に來て

ふと驚きぬ

見すぼらしげに歩むものかも

○同上。

鏡屋には勿論諸種雜多の鏡が並べられてある。その前に來て、一つの鏡にうつつた自分の姿を見ると、なんと見すぼらしい様子で歩いてゐる自分だらうと思ふ。氣がついてみると、自分の歩くにしたがつて、一つではない、幾つもの鏡に、次から次へと、自分のみじめな姿がうつる。最初一つの鏡にうつつたのを見た時、はつと驚いた。ついで幾つもの鏡にうつるのを見ては、しみじみと身の貧しさを感じたことであらう。

空家に入り

煙草のみたることありき

あはれただ一人居たきばかりに

○同上。

これは孤獨を求める心である。氣ちがひじみてゐるなどといつてはならない。これがこの人には眞實であり、さうしなければゐられなかつた事であつた。

あたらしき背廣など着て

旅をせむ

しかく今年も思ひ過ぎたる

○同上。

新しい背廣服でも着て、すがすがしい氣持で旅をしたいものだ。今年こそ是非さうしよう。と、さう思つてはゐたが、思つてゐただけで、貧しい故に、背廣服の新調もできず、ましてのんきな旅などもできず、とうとう年末になつてしまつた。といふ歎きである。

病のごと

思郷のこころ湧く日なり

目にあをぞらの煙かなしも

○同上。第二篇なる「煙」の最初の一首。

同上。第二篇なる「煙」の最初の一首。

これも有名な歌である。目に見るところは青空に立ち迷ふ煙であるが、それが何ともいへず悲しく寂しく見えるのである。それはただ故郷をこひしく思ふ心の切なる故である。ここには少年らしい感傷がある。

愁ひある少年の眼に羨みき

小鳥の飛ぶを

飛びてうたふを

○同上。

ここにも少年の感傷がある。が、かうした感傷を思ひ出して、我ながら思はずほろりとする日が誰にもあることであらう。

やはらかに柳あをめる

北上の岸邊目に見ゆ

泣けとごとくに

○同上。

故郷なる遊民村の小高い岡に立つて作つたものである。目の下に北上川が流れてゐる。その岸のほとりには、やはらかな感じで、柳が青い芽を出してゐるのが見やられる。しかもその景色が、あたかも泣けといつてゐるかのやう

に。といふこの歌もやはり涙の多い少年の心を歌つてゐるが、又よく春愁といふやうにはれる、春さきの何さいふことのない。うら悲しい氣分をも歌つてゐる。啄木十回忌の時に、土地の青年によつてこの岡に記念碑が建設せられ、この歌が刻せられてあるといふことである。

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

○同上。

この心持もすべての人に共通なものであらう。なほ

かにかくに濫民村は戀しかり

おもひでの山

おもひでの川

又、

汽車の窓

はるかに北にふるさとの山見え來れば

襟を正すも

これら、故郷に對する心持も、誰しもが同感するところであらう。

わが去れる後の噂を

おもひやる旅出はかなし

死ににゆくごと

○同上。「忘れがたき人人」の中。

北海道の歌である。やや久しく住み馴れた土地を出て、他に移るとき、自分がゐなくなつた後、口さがない人たちは定めし自分のことを何かと噂するであらうと思ふと、いやな氣持がする。死んでゆくやうに、たまらなく悲しく思ふといふのである。神経質な性格があらはれてゐる。

寝つつ讀む本の重さに

つかれたる

手を休めては、物を思へり。

○「悲しき玩具」の歌。

病床の作である。かういふことも誰にも同感できることであらう。悲痛な歌である。

庭のそとを白き犬ゆけり。

ふりむきて、

犬を飼はむと妻にはかれる。

○同上。

これが最後の歌である。

田波御白

石川啄木と同年輩で、もう一人薄倅な歌人があつた。即ち田波御白である。啄木と同じく明治十八年、栃木縣の巴波河畔に生れた。本名は庄藏。岡山の第六高等學校を経て東京帝國大學文科に入り、卒業すべき明治四十四年、不合格の學科があつたのみならず、その秋ごろから肺を病み、傳染病研究所から平塚の杏雲堂病院に、更に七里が濱の鈴木療養所に移つて、そこで歿した。大正二年八月二十五日、年二十九であつた。金子薫園の主宰する白菊會の同人であつた。歌は「帝國文學」その他に發表してゐた。「御白遺稿」が大正三年四月に出版された。

黄濁の海のうへとぶかもめかもめ肺やむわれに痛ましいぞよ

○「帝國文學」に發表されたもの。「御白遺稿」に收められてある。「平塚より」と題するもの一首である。

なんと悲痛な叫びであらう。鷗に向つてなじるやうにいつてゐるのである。

五月雨よふれふれふりて樹々の葉のみどりを黒く朽ちはてしめよ

○同上。やはり「平塚より」の中。

かういふ病氣で寝てゐると、いらだたしくなつたり、陰鬱になつたり、或は自棄の心持になつたりする。今、五月

雨がふつてゐる。その五月雨に向つて、もつと澤山ふつて、あの縁に誇つてゐるやうな木の葉を、ちんと敲きつけて、まつ黒にしてしまひ、腐つてしまふやうに苦しめてやつてくれ、といふのである。しかも強迫するやうにいふのである。その心の中には、健全なものを虐げて喜ばうとする心が潜んでゐる。氣味の悪いほど凄い叫びである。

涙ながして笑ふことさへおぼえたりやみてふたたび春にあへりけり

○同上。「七里が濱より」の中。

これも悲痛な歌である。註釋を忘れて、しみじみと味はひたい。

見渡せば海には海の秋來る涙ぐみつつ死をおもふかな

○「ネムノ木」に發表したもので「御白遺稿」に收められてゐる。「鈴虫の死と海」の中の一首。

七里が濱の療養所にゐた頃の作である。海には海の秋が來た。自分にも春が過ぎ、夏が過ぎて、秋になつたけれども、まだかすかに生きてゐる。しかしこれでいつまで生きられる身でもない。近く死ぬべき時が迫つてゐるのである。と、死を思ふ時、我知らず涙ぐんでゐた。

ふくらみてまなをとちてしづやかに死をまつよりはほかなき小鳥

○「新潮」に發表した歌で「御白遺稿」に收められてゐる。「死ゆく小鳥」と題する一聯の中。

小さな身體がふくらんで、ちつと目をとちて、しづかに死を待つてゐるよりほかに、どうともしようのない小鳥、それは又この作者その人を象徴するものであらう。

七里が濱海ころなく高鳴りて秋ゆくころに人を死なしむ

○「情詩」に發表し「御白遺稿」に收められてあるもの。「ないふの錆」題する一聯の中。

七里が濱の波の音が高く聞える。それを聞きながら自分は一日一日と死に近づきつつある。海よ、海は心なく、思ひやりもなく、情もなく、ただ高い音を立てて鳴つてゐる。その音が、折しも秋の暮れてゆく頃、自分を死なせる。自分はその音を聞くに堪へられず、今にも死んでいきさうな氣がする。

骨となりわがかへるべき下野の空さへ見えず相模はかなし

○同上。

「死ぬるにはいづくもおなじさはいへどふるさとに歸りて死なまほしけれ」といふ歌をも作つてゐる。同じことから、故郷に歸つて死にたいと痛切に願つた。けれどもそれが許されないとすれば、諦めてしまふよりほかはない。死ぬことは同じだ。死んでしまつて、骨となつて、故郷へ歸らう。と、さう悲しくも思ひ定めて、せめてなつかしい故郷の下野の空を眺めやりたいと思ふ。けれども、起きあがることもできない身であれば、寝ながら窓の外を眺めるけれども、下野の空は見えない。その時「相模は悲しいところだ。」といふ詠歌がおのづから洩れるのである。

【附言】 遺憾ながらこのあたりで筆を止めなければならぬ。この後につづけて少くとも北原白秋、土岐哀果、吉井勇、齋藤茂吉ぐらゐるは書きたいし、これより前にも服部躬治、相馬御風、平野萬里、岡稻里などにも觸れたかつた

のであるが、すべて頁数の制限があるため思ふやうにいかなくつた。又、佐々木信綱、與謝野晶子、或は前田夕暮、若山牧水など、大正期にも活動してゐた人たちの大正期の作品にはあまり言及せず、明治期の作品を主としたことは、大正期が必ずしも明治期から切離して考へられなければならないことはなく、ある意味では明治期の引續きとして區切りなく考へらるべきであるが故に、頗る遺憾であるが、本講が「明治文學評釋」であるために、やむを得なかつたことを諒とせられたい。なほ本講にあげた諸歌人に對して敬稱を用ひなかつたのは、これを和歌史上の人物として取扱つた爲であつて、立派な歌人たち、殊に現存の諸家に對して、あへて禮を缺かうといふ意に出たものでないことを附言してこの稿を終る。

昭和五年十月十日印刷
昭和五年十月十五日發行

第九回三冊の内

(非賣品)

(第七回配本)

國文學講座

全十二冊の内

明治文學詩歌

編輯兼
發行者

受驗講座刊行會

右代表者

加藤 雄 策

印刷者

濤 川 薫
東京市麹町區下六番町一〇

發行所

東京市麹町區下六番町一〇
株式會社平凡社内

受驗講座刊行會

振替口座東京二九六三九番

終

